
東方華妖戦

鬼人

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方華妖戦

【Nコード】

N2648BA

【作者名】

鬼人

【あらすじ】

現代の裏側にひっそりと存在する幻想郷、ある夏の日の満月の夜、八雲紫は不気味な気配にいち早く気付き、魔法の森を訪れた…

プロローグ 気配

獣さえも恐ろしさに身を潜める妖怪達の時間、森、山、湖、幻想郷の全ては淡い月の光で照らされていた。今宵は満月。闇の力が最も強くなる時である。

妖怪の賢者、八雲紫は魔法の森の中を歩きながら、辺りを見回した。木々が生い茂るこの森では、地上まで月の光が届かない。だが紫は空に浮かんでいる、夜の象徴の存在をひしひしと感じていた。

紫「こんな月の綺麗な晩にこんなことが起こるなんて、本当に面倒だわ」

その風貌に似あわぬ鋭い目つきで再度、紫は辺りを見回した。やはり気のせいではない。侵入者がいる。それもただの侵入者ではない。この気配は…

紫「まあ、いいわ。向こうがそのつもりならこっちだって喜んで相手になるわ」

紫はそう呟くと、闇の中に消えていった。

第一話 暑い夏の神社にて

魔理沙「霊夢うゝ、暑いぜ」

そう言いながら、白黒の少女が空から降りてきた。それを見て、境内の掃除をしているフリをしていた霊夢はため息をついた。

霊夢「毎回毎回思うんだけど、夏なんて何処にいても同じでしょ？なんで毎日神社に来るのよ」

魔理沙「暑いから暇をつぶしに来たんだぜ。取りあえず麦茶でもくれよ」

霊夢「裏に井戸があるわよ」

霊夢は持っていた箒で神社の裏の方を指した。

魔理沙「井戸の水なんか温くて不味いだろ？いいから麦茶出せよ」

霊夢「確かにそうだけど、麦茶だって冷たくないわよ。こんな暑い中で冷たい飲み物なんか有るわけないでしょ」

魔理沙「嘘つくな。紫に冷蔵庫とかいうの貰ったんだろ？香霖が言うには、冷蔵庫は一年中食べ物とか飲み物を冷やしておけるって聞いたぜ」

霊夢は顔をしかめた。

霊夢「なんで冷蔵庫貰ったこと知ってるのよ？」

魔理沙「紫本人がこの前の宴会でベラベラ喋ってたぜ。気づかなかったのか？」

霊夢「なんで紫は呼んでないのに何時もいるのかしら…仕方ないわね」

霊夢は渋々、神社の裏の方に回っていった。魔理沙は「イヒヒ」と笑いながら、その後を追った。

萃香「お〜い霊夢う、つまみ無いの？つまみ」

神社の裏の縁側では、伊吹萃香が一人で座って酒を呑んでいた。

霊夢「あんた…何時からいたの？」

萃香「魔理沙が来るちょっと前にはいたねえ。それより酒のつまみ無いの？」

霊夢は箸を投げ捨てると、建物の中に消えた。

魔理沙「あれはかなりイライラしてるぜ。イヒヒ」

萃香「まあ、仕方ないさ。いきなり自分の家に来て図々しく食べ物要求する奴が二人もいるんだから」

魔理沙「あいつをあんまり怒らせない方がいいぜ。上から陰陽玉が降ってくるからな」

萃香「魔理沙もね」

二人は顔を見合わせて、性根の悪い笑みを浮かべた。

霊夢「ほら、持ってきてあげたわよ」

霊夢が戻ってきた。不機嫌そうな顔で戻ってきた。

萃香「スルメイカか、しけてるねえ」

霊夢「ほら、キンキンに冷えた麦茶よ」

魔理沙「ああ、ご苦労さん」

三人は並んで縁側に座った。霊夢は熱いお茶を持っていた。

魔理沙「こんな時によくそんな物飲めるな」

霊夢「熱いお茶が一番よ。それにしても今年は夏が長いわねえ」

萃香「確かにそうだね。もう九月の終わりだってのに、まだまだ暑さが引く気配がないね」

霊夢がピクツと動いたのが他の二人にはわかった。

魔理沙「多分、異変じゃないぜ。確かに暑さが続いているけど、一昨年なんて十月の中旬まで猛暑が続いたじゃないか。その時も何にもなかったんだろ？」

霊夢「そういえばそうだったわ。最近、大きな異変が起きないわねえ」

魔理沙「そういえばそうだな。最後に起こったでかい異変ってなんだっけ？」

霊夢「でかい異変って言われても、程度がわからないじゃないの。異変なんてほぼ毎日起こってるようなもんなんだから」

魔理沙「…返す言葉がないぜ。なんか面白いことでも起きないかなあ」

霊夢「魔理沙の言う面白いことは起こってほしくないわね。私は面倒だから神社から動きたくないわ」

魔理沙「あつ」

魔理沙が何かを思い出しように立ち上がった。

霊夢「どうしたの？」

魔理沙「今日はアリスの家に行くんだった。忘れてたぜ」

霊夢「アリスの家って…何しに行くの？」

魔理沙「珍しいキノコが採れたらしいから、貰いに（パクリに）行くんだ」

そう言っと、魔理沙は飛び去って行った。霊夢はため息をつくと立ち上がった。

霊夢「本当にキノコ好きねえ。さて、私も掃除しなきゃ。萃香はそ

こで大人しくしててよ？」

萃香「はい」

萃香が笑いながら頷くのを見て、霊夢は境内の方に消えていった。そして、縁側には萃香一人になった。

萃香「どうやら気づいてないみたいだよ」

紫「どうやら、そうみたいね」

空間がパツクリと割れ、萃香の後ろから紫が出てきた。

萃香「霊夢にしては珍しい、まさか異変の気配に気づかないなんて」

紫「仕方ないわよ。今回ののはただの異変じゃないんだから」

萃香「まあ、確かにそうだねえ。こんな些細な気配に気づけるのは妖怪ぐらいだしね。それに今回は、異変と言っていいかわからないしね」

紫「そうねえ。こんなこと、あの吸血鬼以来ね」

萃香「いや、あの吸血鬼よりよっぽど性質悪いと思うけど」

紫「取りあえず、今は警戒するしかないわ。萃香もしっかり見張ってて頂戴よ？」

萃香「わかってるわかってる、任せろって」

紫は「フフフッ」と笑うと、スキマの中に消えていった。

第二話 赤い眼の少女

太陽が真上に上り始めたころ、藤原妹紅は竹林の中を歩いていた。何かしようとしたわけではなく、ふと思いついて散歩していたのだ。…と言いたいところだが…

妹紅「一体どこのどいつだ？」

妹紅は辺りに注意を配りながら呟いた。朝起きた時からだ、家の周り…いや、竹林全体に不気味な妖気が漂っていたのは。その妖気の正体を探して、妹紅はずっと竹林の中を歩き回っているのだ。気になるとかそういう類の物ではない。

なにか…自分の中の本能というやつだろうか、それがこの竹林にどんなでもない奴がいると告げている。千年以上妖怪の相手をしてきたが、こんな感覚は初めてだ。

妹紅「こいつが私を殺してくれるかとも思っているのか？」

自分自身に問いかけて、妹紅はフツと笑った。今更死ねないことぐらいわかっている。だが、やはりこの長い苦しみから解放されたいとは思っている。そう思って、ずっと危険を冒してきたのだから。

妹紅「む？」

小さな少女が妹紅の方に背を向けて立っていた。この辺りは妖怪が多く出る、竹林の奥地だ。何をしているのだろうか？

妹紅「おい、お前こんなところで何してるんだ？」

妹紅は少女に呼びかけながら、走り寄った。少女は振り向いて、まっすぐに妹紅の方を見た。

バンシー「私バンシーっていうの、あなたのお名前は？」

燃えるような真つ赤な目を見た妹紅は、その場から動けなくなった。

バンシー「ねえ、お名前は？あなたのお名前、教えてよ」

こいつだ、間違いない！不気味な妖気の正体はこの少女だ！

妹紅「お前：妖怪か？」

バンシー「私はバンシー、あなたは？」

妹紅はバンシーの動きに警戒しながら答えた。

妹紅「私は妹紅だ」

バンシー「もこうっていうの？変わった名前ね。あなたの…」

バンシーは突然、目をカッと見開いて後退さった。

妹紅「おい、どうし……」

バンシー「あああああああああああああああああああああああ！！」

バンシーは頭を抱え込むと、その場にしゃがみ込んで絶叫した。妹紅は驚いてサツと身構えた。

バンシー「命が、命の底が見えない！こんな…こんな、あああああああああ！！」

バンシーはガバツと立ち上がると、妹紅の方を見た。目を限界まで見開いているが、真つ赤なので見えているのかわからない。醜くゆがんだ顔で血の涙を流している。

バンシー「がああああああああああああああああああああああ！！！！」

バンシーは妹紅に襲い掛かってきた。まったく訳が分からないが、長年の戦いで鍛えられた本能が妹紅の意思より早く動いた。

妹紅「はあっ！」

横に動いてバンシーをかわし、まだ空中に体があるうちに強烈な回し蹴りをお見舞いした。妹紅に蹴られたバンシーは吹っ飛んで地面に叩き付けられた。

バンシー「がはっ！」

妹紅「なんなんだよ、まったく」

悪態をつきながら、妹紅はバンシーから距離を取った。こいつの近くにいと、何故かはわからないが身の毛がよだつ。

バンシー「がああ…ああ、がああああ」

妹紅を睨むバンシーは既に真面な言葉を発していなかった。なんなんだよ、本当に！

妹紅「私がかしたのか？」

問いかけてはみたが、思った通り返事は返ってこなかった。

バンシー「がああああああああああ！！！」

妹紅の蹴りのダメージは無いのか、また飛び掛かってきた。

妹紅「えい、もうどうにでもなれ！」

妹紅はバンシーのガラ空きの胴に向かって、また蹴りを入れた。手応えはあった、だが返り討ちにされる前にバンシーは残像となってスウィーツと消えてしまった。

妹紅「何！？」

バンシー「がああああ！！！」

突如、背後から現れたバンシーは妹紅の背中に抱きついた。

バンシー「があああああ、がはっ！」

妹紅「うつとおしい！」

妹紅の体から発せられた炎は巨大な翼を形作り、一気に二人を呑み込んだ。

バンシー「があああああ！あああああああ！」

妹紅は無傷だが、バンシーはただでは済まない。高温の炎に焼かれ、地面を転げまわっている。全身に火傷を負っているのだが、その傷はみるみるうちに回復していく。やはり妖怪なのだろうか？

妹紅「少しは落ちていて私の話を聞け。私が何かしたのか？」

流石に静かになつた。それにしても、今の動きはなんだつたんだ？手応えは確かにあつた。それなのにこいつは後ろから現れた。妖術か何かか？

バンシー「がああつ！」

バンシーは飛び起きると妹紅の方を見た。こいつはさっきから真面目な言葉を喋らないうえに、ずっと目が赤いままだ。最初は普通に喋ってたのに一体なにが…

バンシー「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああ
ああああああ！！！」

妹紅は鼓膜が破れるかと思うほどの大絶叫に、思わず耳を塞いだ。

妹紅「くそ……なんだよ、こいつ……」

そう呟いた瞬間、バンシーの叫び声が突然途切れた。また襲い掛かってくるのかと思い、すぐに身構えたがもうそこには赤い眼の少女の姿はなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2648ba/>

東方華妖戦

2012年1月14日16時48分発行